ハッタリ男の生存譚

朝が嫌い

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

剣もほとんど使えず、武の才能はほとんどなく、それゆえ捨てられた少年。あるのは殺気を操作する才能だけ。ハッタリと経験で生き残れ！

目　次

始まり ―――― 1
圧倒とピンチ ―――― 6
始まりと憂鬱そして・・・ ―――― 11

始まり

俺は今日からある学園に行くことになった。私立愛地共生学園――――問題児たちを矯正するための学園だ。まあ、俺が行く目的は違うのだが。ここで俺の話をしよう。俺は、まあ、ずば抜けた武の才能がなかった。しかし、悲しいことだが俺は武術名門に生まれてしまったのである。名門で才能がないものは、生きづらいのは想像に難くない。使えぬものには手厳しい場所だった。・・・ある日、俺は捨てられてしまったのだ。曰く、使えないやつはいらないらしい。雨に濡れながら暗い道を歩き続け、ふつふつと怒りが出てきたのを感じた。何故俺がこんな目にあっているのか。・・・力がないからか？相手を殺すための力がないからなのか？怒りは殺気に代わっていた。必ず殺してやる。・・・そして、ある男に出会った。

「おい坊主、お前はその地獄から抜け出したいか？」

「ああ抜け出したい。力がいる」

「ヒヒヒ、お前さんは面白い才能を持ってるぜ。俺とともに来い力の使い方を教えてやる」

俺はその男の手を取った。

★★★★

「今回のはまたすごいな。」

集まっているのは、武装女子のトップに君臨する五人の女剣士。

「今回は凄まじいな、前の学校で乱闘騒ぎ７０名も倒したのか」

「・・・名前は白羽　藍色か」

「眠目　さとりお前のクラスに来るらしい。お前が矯正しろ」

「わかってるよ～」

★★★★★

でかい門をくぐると広い敷地に出た、そこには武装した女子と女装した男子がいた。

「これは、酷いな」

朝からゲテモノを見た。まともなものを見ようと思い、職員室に急ぐ。手早く手続きを済ませ、教室に行く。

高校一年の教室だ。扉を開けると

「そーれ」

目の前に、刃が出てくる。反射でぎりぎりで躱す。

そこには、緑色の髪をした不思議系少女がいた。

「いきなりだけど～君のことを矯正するから動かないでね～」

「断る」

短く答えて、下段からの攻撃を避ける。きみって

左手でつかんだ刀身を掲げ、矢を放つように離す。まるでデコピンのような跳躍切り。

視線の方向からくると読んでいたのだが、全くの別からの攻撃。しかし、俺には当たらないな。

「んッ・・・」

皮膚を掠る形で避ける。その理想的な回避に相手の少女は驚いたようで目をわずかに見開く。

「この程度か?話にならんな」

俺は、あの男に、殺気を操る才を認められた。だが、それだけでは勝てない。ハッタリでごまかすことは出来てもそれだけでは倒せない相手もいる。

『お前さんは、武の才能には恵まれなかったが、恵まれなかったなりに一つに絞って極限まで研ぎ澄ませばやり方次第じゃ天才ともやり合える。まあ、化け物と呼ばれる奴らには無理だがな。』

そう言われた。一つに絞り磨き上げる、俺の場合、それは回避だった。あの男との日々は回避の訓練に大半をつぎ込んだ。回避のためには、相手の攻撃を読む経験と攻撃

をより深く理解し先読みするための知識が必要だった。俺はひたすらあの男と戦い続け、そして知識をため続けた。そして事実、俺は天才と呼ばれたものに負けていない。

「どうした?·話にならんぞ」

挑発しながら、相手の攻撃をかわしていく。巻き落とし、引き切り、阿吽・・・

「お前の流派は神道無念流か」

動揺を誘うためにそう問いかけるが、少女はニィと口角を上げ

「残ね～ん、１０点かな～」

八天切り――――

紙一重で躱せたが、流派が変わった。

なるほど・・・厄介だな・・・だが

「なるほどな、観の目にその剣、確かにお前は強いが・・・お前は化け物ではないな」

「ツッツ・・・」

少女の動きが一瞬止まった。ここだ!!

一気に距離を詰める。

少女は反射的に剣をふるう・・・その前に

殺気操術――――邪眼

濃縮した殺気が少女を貫く。

圧倒的な殺気は、生物に危険信号を出させ恐怖で動けなくする。少女の体は固まり動けない。鳩尾に蹴りを放つ。少女は教室の外のまで吹っ飛び意識を失った。

圧倒とピンチ

なんやかんやあって、取り合いず今日は寮に帰れと先生に言われ帰ることになった。
中庭を抜けようとしたら、
「待て！」
「行かせると思いまして」
藍色の前に二人の少女が立ちふさがる。その目は、油断はしていないが自信に満ち溢れていた。気に食わない。
「・・・退け！」
広範囲に殺気をまき散らす。
殺気操術――――重殺
「くッ・・・」
「これは・・・」
藍色は怯んでいる間に、二人の間に入る。
「今お前らを殺すことは簡単だ。だが、お前らは俺が殺すに値しない」
そう言い残し、去って行った。

★★★★

眠目さんは、負けてしまいましたか。それにしても・・・気になりますね。接触してみますか。

★★★★

此処が男子寮か。ひどいな、女子寮との差がありすぎるな。まあ、どうでもいいことだがな。

俺は、ほう、一人部屋か・・・ラッキーかな。

しかし分からないことだらけだな。この学園は・・・・・・・

「おいそこの」

通りすがりの男子を捕まえる。

「何よ」

「この学園のことについて説明してくれないか?」

口調は柔らかで、しかし雰囲気は有無を言わせない。

「わ、分かったわよ」

要するに、この学校は天下五剣という女子生徒に支配されているらしい。そして、俺が倒したあの少女はそのうちの一人で、恐らく、今後別の天下五剣が現れるということ

らしい。
率直に言ってめんどい。あの男が言っていたのはこのことか。でも、目的のためには仕方がない。覚悟を決めるか。
★★★★
朝起きたら、呼び出しの紙があった。
『今日の、夜12時噴水の前まで来られたし』
め、めんどくさい。

「こんなところに呼び出して何の用だ」
そこに居たのは、白い髪をした少女だった・・・一目見ただけでわかる、やばいやつだ。
化け物と呼ばれる人種だ。
次の瞬間、首筋に刃があった。
「ッ・・・」
「やはりですか。気になることがあったんですよね。あなたの戦闘は聞いていましたが、違和感があったのです」
「・・・」

「あなた、あんな殺気を出せていながらこの程度の攻撃をかわせていない」
「この程度だと・・・」
「ええ、確かにこの学園で見切れるのはいないですけど眠目さんを簡単にあしらったあなたなら躱せても不思議ではありません」
「ですが、あなたは躱せなかった・・・これから導かれる答えは一つ・・・あなたの実力は見せかけだという「もういい」」
　なるほど、こんなに早く見破られるとはな・・・
「それで、俺をどうする?」
「フフフ、取引をしませんか?」
「取引だと?」
「はい、このことは黙っておいてあげます。その代りに私の子分になってほしいのです」
　デデーンという音が聞こえてきそうなほどない胸を張る。
「今失礼なことを考えませんでしたか?」
「いや、考えてない。それより理由を教えてもらっても?」
「・・・良いでしょう。五剣の皆さんにはそれぞれ妹分がいます。私だけいないのですよ。」
「なるほど、俺には拒否権がないのを分かってきいてくる当たり性格が悪いな」

「生意気な子分でがっかりです。別に、あなたが何をしようと止めるつもりはありません。ただ私がお願いしたことには従っていればよいのです」

「・・・はあ、分かった」

満面の笑みで、因幡は

「交渉成立ですよ」

明らかな脅しを交渉と言ってきた。初日から、前途多難すぎる。

始まりと憂鬱そして・・・

ハァー。俺は嘆きたい、何故こんな状況になっているのか。
自分の前を歩く白い少女を見ながら思う。
因幡の後ろを歩くやつが珍しいのかそれとも因幡と会話をしているやつが珍しいのかはたまた昨日暴れた俺の珍しいのか知らないが視線の暴力ががすごい。
しかし五剣を倒した俺が怖いのかチラチラと見てくるだけでまともに視線を合わせようとはしない。
視線の暴力に耐えかね俺は因幡に聞く。
「俺は毎日お前の後ろをついて歩かなくちゃいけないのか?」
「　も?何か問題でも、あなたは私の子分ですよ?何なら、お姉さまと呼んでもいいのですよ」
「冗談きついな・・・因幡」
「　そのやり方はあまり好ましくありませんね、　もっと敬意のある呼び方はないのですか」
敬意ね・・・

「　あんたの武術を教えてくれるなら師匠って呼んでやってもいいぜ」
「師匠・・・良い響き。いいでしょう、この私があなたに武術を教えて差し上げます！」
くるっと後ろ振り向き少しうっすらと因幡が笑う。
少し嬉しそうに話す因幡を見て俺は、こうしてると普通の少女なのになーと思う。
「　あと俺の件なんだが　・・・俺のハッタリについてだが、話さないって方向でいいんだよな」
「　ガッカリです。まだ、疑ってるんです?今のところあなたが脅威になる事はありませんし、私の言うことを聞くのでしたら、話す気はありませんね。その方が、都合が良いですし」
実に腹が立つ理論だが俺にとっては都合がいい。
「それならいいんだがな」
「　放課後授業が終わったら私のところに直行で来てください寄り道は認めません　何しろあなたは私の子分なのですから」
「　へいへい」
「　キャラが壊れてますよ」
「　いいんだよ誰にも聞こえない声ように小声喋ってるんだから」
「　もうそろそろチャイムなりますよ　教室に行った方が良いですよ」

「　俺普通に教室に入っても大丈夫なんだろうな」
「　はい五剣会議であなたの事を話しておきましたので」

教室に入ると案の定眠目がこちらを見てきた。
周りの生徒はというと俺の殺気による威圧感に押され目を合わせようとしない。
昨日はとっさのことであまり見なかったかなかなか可愛い顔立ちをしているがその目が整った顔立ちん打ち消すほど不気味な雰囲気を醸し出している。　ただ前にもこういうタイプは見たことがある、しかし慣れてない奴にとっては不気味で仕方がないだろう。
「　おはよう～。藍色ちゃん～」
「　それはまさか俺のことか？」
「　そうだよね　さとりは君のこと結構気に入ったんだ～」
威厳のある魔王キャラを通したい俺にとってそういうニックネームは邪魔なものでしかない　しかしやめろと言っても言うことを聞くタイプではないだろうということを察していた俺は　スルーすることに決めた　。

チャイムが鳴り教師が教室に入ってくる。しかし、なぜか眠目は俺の隣の席から動くことはなかった。

「　お前はそこの席ではないだろう自分の席に戻れ」

「　今日からさとりの席は君の隣なんだよね～　よろしくね～」

そんな恐ろしいことを言い始める眠目。　確かに担任の教師も何も言わない　くそこれが五剣の権力か。

こうして、前途多難な俺の日々は幕を開けた。

大丈夫だろうか、俺。